The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	モンテーニュと風刺
Author(s)	徳永, 雅
Citation	Gallia. 2008, 47, p. 21-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12646
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

モンテーニュと風刺

徳永　　雅

はじめに

モンテーニュの研究史を通覧する時、「モンテーニュと風刺」というテーマにこれまでほとんど光が当てられてこなかった意外な事実を指摘することができる。それは、モンテーニュ自身も断言しているように、その主著『エセー』には著者の考えが率直に、時には正直過ぎるほど正直に述べられていると一般的に見做されてきたからであろうし、『エセー』という作品が、所謂「風刺」というレトリック、あるいは「風刺」というジャンルとは凡そ無縁であるからではないだろうか[1)]。しかしながら、モンテーニュはホラティウスをはじめとするローマの「風刺詩人」と称される詩人たちの作品を愛読しており、『エセー』の中にも風刺詩からの引用が数多く使用されているのも事実であり、風刺文学の最高傑作の一つとされる『痴愚神礼讃』の作者エラスムスからモンテーニュが少なからずの影響を受けていたであろうこともまた、ピエール・ヴィレーなどの指摘の通りである。さらに、『エセー』には衒学者や医者に対する批判的な記述が散見されるが、その中には風刺的とさえ言える文章がかなり存在する。一方、モンテーニュ独自の記述様式とされる所謂「自己描写」«la peinture du Moi»を風刺とは一切無縁な記述行為として等閑に付してよいのかという問題も提起できよう。

本稿の目的は、以上のような多岐に亘る問題点を解明するにあたり、まず、『エセー』における風刺作家からの引用部分を概観し、その意義について考察した後、モンテーニュの他者に対する風刺的な記述、及び、風刺と「自己描写」との関連性について解明することにある。

1．『エセー』における風刺作家からの引用とその意義

	(A) の引用 ～1580	(B) の引用 1580～88	(C) の引用 1588～	引用回数の合計	名前の記述回数
1. Horace	80	65	3	148	4
2. Catulle	5	23	1	29	7
3. Perse	1	21	1	23	0
4. Juvénal	4	46	0	50	0
5. Martial	24	15	2	41	5

1）『エセー』の序文は«C'est icy un livre de bonne foy, lecteur.»という一文から始まっている。『エセー』における«bonne foi»の問題については、拙稿「『エセー』の«bonne foi»に関する一考察」、『シュンポシオン　高岡幸一教授退職記念論文集』、朝日出版社、2006年、pp.235-244参照。

これは、『エセー』に見られるローマの風刺詩人からの引用回数をピエール・ヴィレーによる実証研究に基づいて表にまとめたものである[2)]。引用が為された時期を明らかにするために、（A）1580年版初版のテキスト、すなわち1580年以前の記述部分、（B）1588年版で加筆訂正されたテキスト、すなわち1580年から88年の記述部分、（C）1588年版にモンテーニュが自筆で加筆したテキスト、すなわち1588年以降の記述部分に分けて示してある。さらに、『エセー』の『コンコルダンス』をもとに、それらの詩人の名前が記述されている回数を付け加えた[3)]。この表に基づき、それぞれの風刺詩人からの引用方法と影響について考察する。

まず、ホラティウスについてだが、ホラティウスからの引用と考えられているものは148箇所あり、ルクレティウスと並んで、桁外れに引用の多い詩人である。1580年の初版に80回と最も多くの引用があり、1588年版にも65回の引用があるが、その多くは、引用の前後に説明が補われていたり、引用の内容から論が展開したりしていることから、モンテーニュが章を構成する際に、同時に組み込んでいることが見て取れる[4)]。『エセー』の最終章もホラティウスの詩の一節で締めくくられているため、ホラティウスからの引用は『エセー』において重要な位置を占めていると言わざるを得ない。

カトゥルスは、ウェルギリウス、ルクレティウス、ホラティウスとともに優れた詩人の一人に挙げられており、さらにマルティアリスとの対比において、上品で優雅であるとの賛辞を与えられている[5)]。カトゥルスからの引用は1588年版に集中しており、その内の半数は第3巻第5章「ウェルギリウスの詩句について」に見られる。また、この章の最後は、カトゥルスの引用にモンテーニュ自身の意見を付け加える形式をとっている。以上から、恋愛及び性愛をテーマとしたこの章において、モンテーニュはカトゥルスを随所で引用することによって、あたかもカトゥルス自身が語っているかのような印象を与えつつ、章の主題と不可分な官能のテーマを間接的且つ効果的に喚起していると考えられる。

ペルシウスとユウェナリスからの引用も1588年版に集中しているのだが、カトゥルスの場合とは異なり、この1588年版の引用の大部分は、1580年以前の記述部分に詩句の引用だけを加筆したものである[6)]。モンテーニュは1544年に出版されたペルシウスとユウェナリスが1巻に収められた本を所有し読んでいたと推定さ

2）Pierre Villey, *Les Sources et L'Evolution des Essais de Montaigne*, Hachette, 1908, t.I, pp.96-97, 149-150, 155-156, 174-175, 189.

3）Roy. E. Leake, *Concordance des Essais de Montaigne*, Genève, Droz, 1981, pp.188, 602, 738.

4）Montaigne, *Essais*, éd. Villey-Saulnier, PUF, 1965, I, 39, p.239. ここでは、ホラティウスの*Epîtres*と*Odes*からの引用が挿入されているが、2箇所とも1580年版の執筆部分であり、執筆時に既に引用が論の展開の中に組み込まれていたことがわかる。尚、『エセー』からの引用及び参照ページは全てこの版のものであり、ローマ数字は巻を、アラビア数字は章を表す。また、引用文中の記号（A）は1580年版初版のテキストを、（B）は1588年版の増補部分を、（C）はその後の加筆部分を表す。ラテン語の引用については、この版の註に基づきフランス語訳及び出典を付してある。

5）*Essais*, II, 10, pp.410-412.

6）例えば*Essais*, I, 39, pp.246-247 では、1580年版の執筆部分に1588年版でペルシウスからの引用が2箇所加筆されている。また、II, 12, p.576 でも同様に、1580年版の執筆部分に1588年版でユウェナリスからの引用が加筆されている。

れており[7]、初版の『エセー』を読み返しつつ、文脈に合った詩の一節を取り出しては挿入していた様子が窺える。

マルティアリスについては、詩人としての評価は低いものの、ローマの風俗や習慣などを描写する様々な詩の一節を繰り返し引用している。特に第1巻第49章「昔の習慣について」には、極めて短い章にもかかわらず、マルティアリスからの引用が5箇所に亘って見られ、マルティアリスからの引用を中心として章が構成されていると言っても過言ではない[8]。様々な時代や国の風俗、習慣«mœurs»を好んで『エセー』に描き出したモンテーニュにとって、マルティアリスからの引用は貴重な資料になっていると言えよう。

このように、それぞれの風刺詩人については、引用の方法が様々であり、モンテーニュの各詩人への評価も異なるが、特に1580年版と1588年版においては風刺詩人からの数多くの引用が存在し、各章の重要な構成要素となっている。

次に、エラスムスからの引用箇所についても考察してみたい。ヴィレーは、『エセー』におけるエラスムスからの直接の引用部分を確定していないものの、精緻な分析の結果、モンテーニュがエラスムスから包括的な思想的影響を受けたと推測している[9]。第2巻第12章「レーモン・スボンの弁護」では、ホラティウスの詩からの2つの引用の間に、エラスムスの『格言集』と『痴愚神礼讃』の中に記されているエピソードが挿入されている[10]。

(A) *potare et spargere flores*

Incipiam, patiárque vel inconsultus haberi. (Horace, *Epîtres*, I, v, 14.)

«Je vais boire et répandre des fleurs, dussé-je passer pour fou.»

Il se trouveroit plusieurs philosophes de l'advis de Lycas: cettuy-cy ayant au demeurant ses meurs bien reglées, vivant doucement et paisiblement en sa famille, ne manquant à nul office de son devoir envers les siens et estrangiers, se conservant très bien des choses nuisibles, s'estoit, par quelque alteration de sens, imprimé en la fantasie une resverie: c'est qu'il pensoit estre perpetuellement aux theatres à y voir des passetemps, des spectacles et des plus belles comedies du monde. Guery qu'il fust par les medecins de cette humeur peccante, à peine qu'il ne les mit en proces pour le restablir en la douceur de ces imaginations,

pol ! me occidistis, amici, Non servastis, ait,
cui sic extorta voluptas, Et demptus per vim mentis
gratissimus error; [...] (Horace, *Epîtres*, II, ii, 138.)

«Hélas! vous m'avez tué, mes amis, dit-il, au lieu de me guérir,
vous m'avez enlevé mon bonheur, vous m'avez arraché l'illusion

7) Pierre Villey, *op. cit.*, t.I, p.189.
8) *Essais,* I, 49, pp.296-300.
9) Pierre Villey, *op. cit.*, t.I, pp.125-126.
10) *Essais,* II, 12, p.1283.

qui faisait toute ma joie.» [II, 12, p.495]

日常生活においていつも劇場にいて面白い芝居を見ていると思い込んでいた狂人が医者に治されて憤慨したというこのエピソードは、本章の大きなテーマの一つである人間の知識や理性の虚しさ、ひいては人間の虚しさをモンテーニュが論じてゆく上で、重要な一つの傍証となっている。

最後に、風刺的な作品を残した同時代のフランスの作家との関わりについても見ておきたい。ラブレーについては「暇をかける値打ちがある面白い本」であると述べ愛読していたようだが、ラブレーからの確定的な引用は存在しない[11)]。ロンサールとデュ・ベレーについては「我がフランス詩の信用を高めた」と称賛し、デュ・ベレーの豊かな描写力とロンサールの繊細な創作の才を真似ることは困難であると述べているものの、詩の引用はそれぞれ１箇所に留まっている[12)]。従って、『エセー』には同時代の風刺作家及び詩人から思想的あるいは文体的影響を受けた痕跡はほとんど認められない。尚、デュ・ベレーからの引用箇所については次章で考察する。

２.『エセー』における他者に関する風刺的記述

次に、モンテーニュ自身による風刺的な記述について考察してみたい。『エセー』第１巻第25章「衒学について」の冒頭でモンテーニュは、「私は子供の頃イタリア喜劇の中で学校の教師が道化役にされ、先生という名前がほとんど尊敬の意味を持たないことを悔しく思い、彼らを弁護しようとした」と話を始めた後、引用を交えて次のように言っている。

(A) Mais en cecy perdois je mon latin, que les plus galans hommes c'estoient ceux qui les avoyent le plus à mespris, tesmoing nostre bon du Bellay:

Mais je hay par sur tout un sçavoir pedantesque. [(B) …]

(Du Bellay, *Regrets*, sonnet 68.)

Depuis, avec l'eage, j'ay trouvé qu'on avoit une grandissime raison, et que *magis magnos clericos non sunt magis magnos sapientes*.

«Les plus grands savants ne sont pas les plus grands sages.»

(Proverbe qu'on retrouve chez Rabelais, *Gargantua*, XXXIX.)

[I, 25, pp.133-134]

モンテーニュはデュ・ベレーを«nostre bon du Bellay»と呼び、*Regrets*のソネから衒学者を批判する詩の一節を引用している。また、ラテン語の引用部分は中世の諺であるが、*Gargantua*にも記されていることから、モンテーニュがラブレーの一節を意識して引用した可能性も十分に考えられる。彼は「最も学識のある者が

11）*Essais,* II, 10, p.410, Pierre Villey, *op. cit.*, t.I, p.204.
12）*Essais,* I, 26, p.171, Pierre Villey, *op. cit.*, t.I, pp.119, 208.

最も賢明な者というわけではない」ことがわかってきたと言いつつも、続く部分では、多くのことを知っている精神がそれだけより生き生きとしたものにならないのはなぜなのかとの疑問を投げかけ、次のように続ける。

> (A) Je dirois volontiers que, comme les plantes s'estouffent de trop d'humeur, et les lampes de trop d'huile: aussi l'action de l'esprit, par trop d'estude et de matiere, lequel, saisi et embarassé d'une grande diversité de choses, perde le moyen de se desmesler; et que cette charge le tienne courbe et croupi.
>
> [*Ibid.*, p.134]

具象的な比喩を用いつつ過度の知識の詰め込みを批判しているこの部分は、まさに風刺的記述と言える。しかしモンテーニュは、「だが実際はそうではない。というのはわれわれの精神は満たされれば満たされるほど大きくなるからである」と続ける。さらに、知識においても行為においても優れていた人物としてアルキメデスとタレスの例を挙げ、次のように結論づける。

> (A) Je quitte cette premiere raison, et croy qu'il vaut mieux dire que ce mal vienne de leur mauvaise façon de se prendre aux sciences; et, qu'à la mode dequoy nous sommes instruicts, il n'est pas merveille si ny les escholiers ny les maistres n'en deviennent pas plus habiles, quoy qu'ils s'y facent plus doctes. De vray, le soing et la despence de nos peres ne vise qu'à nous meubler la teste de science; du jugement et de la vertu, peu de nouvelles. [*Ibid.*, p.136]

モンテーニュの批判は学者全般や学問そのものにではなく、当時の学者の学問に対する態度、さらには、判断力の養成や徳とは何かの教育を怠り、専ら知識だけを詰め込む偏向的な当時の教育方法へと向けられる。«De vray»で始まる一文は極めてイロニック且つサティリックであると考えられる。

続く部分では他にも、教師を鳥に喩え、書物の中に知識をあさって自分では吟味せずに生徒に詰め込む行為を風刺したり、そのような教育方法によって知識を詰め込まれた生徒を「使いものにならず、高慢で自惚れが強い」と痛烈に批判したりしている箇所が見られる。また、ある記述では、自分の家を訪れて一日中内容の無い議論を続けたある人物について、«sot»という辛辣な語を用いて風刺しており、さらに1580～88年の加筆部分では、ペルシウスの詩を引用しつつ、その人物の滑稽さを強調している[13)]。

以上見てきたように、『エセー』第１巻第25章「衒学について」では、モンテーニュ自身、衒学者に対して、また、知識を詰め込む教師やその生徒に対して、豊富な比喩を用いながら批判的且つ風刺的な記述をしている。学者や学問そのものにではなく、学問に対する態度や教育方法に問題があるとする独自の見解を打

13）*Essais,* I, 25, pp.136-139.

ち出している点は注目に値するのではないだろうか。このような衒学や知識重視の教育に対する批判は、次の第１巻第26章「子供の教育について」の中でさらに明確なものとなり、モンテーニュは、知識を詰め込むことではなく自分で判断する力を養うことこそが重要であるとの主張を展開してゆくことになる。

３.「自己描写」と風刺

それでは、モンテーニュの批判は他者のみを対象としているのだろうか。次に、所謂「自己描写」の章として有名な第２巻第17章「自惚れについて」を風刺の観点から考察してみたい。

章の冒頭、モンテーニュは「自分の価値について良すぎる意見を持つことも、値打ち以下に見ることも感心しない」と述べ、「儀礼は自己について良く言うことも悪く言うことも許さないから、今は儀礼を捨てることにしよう」と前置きして、ホラティウスを引用しつつ次のように続ける。

> (A) Ceux que la fortune (bonne ou mauvaise qu'on la doive appeller) a faict passer la vie en quelque eminent degré, ils peuvent par leurs actions publiques tesmoigner quels ils sont. Mais ceux qu'elle n'a employez qu'en foule, [(C) …] ils sont excusables s'ils prennent la hardiesse de parler d'eux mesmes envers ceux qui ont interest de les connoistre, à l'exemple de Lucilius:
>
> *Ille velut fidis arcana sodalibus olim*
> *Credebat libris, neque, si malè cesserat, usquam*
> *Decurrens alio, neque si benè: quo fit ut omnis*
> *Votiva pateat veluti descripta tabella*
> *Vita senis.* (Horace, *Satires*, II, i, 30.)
>
> «Celui-là confiait, comme à des amis fidèles, tous ses secrets à ses écrits. Qu'il fût malheureux ou heureux jamais il n'eut d'autre confident; aussi toute sa vie s'y voit dépeinte comme dans un tableau votif.»
>
> Celuy là commettoit à son papier ses actions et ses pensées, et s'y peignoit tel qu'il se sentoit estre. [II, 17, p.632]

モンテーニュは、歴史に名を残すような人物でなくても自己について語ることは許されると言い、ホラティウスの*Satires*からルキリウスに関する詩の一節を引用している。ルキリウスは「風刺詩」というジャンルを確立した人物であり、ルキリウスが用いた韻律、モチーフなどをホラティウスが継承して「風刺詩」の地位が築かれたとされる。モンテーニュはホラティウスを通してルキリウスが自分自身について語っていたことを知り、ルキリウスを模範としたのであろう[14)]。そしてその行為を«se peigner»という語で表し、その直後から「そこで、私はごく幼い

14)『エセー』にはルキリウスの詩から３箇所の引用があるとされる。J. Balsamo, «satire», in *Dictionnaire de Michel de Montaigne*, publié sous direction de Philippe Desan, Honoré Champion, 2004, pp.890-891.

頃から私の中にどこかしら偉そうな威張った物腰や態度があると人に言われたことを思い出した」云々と自己についての描写を始めるのである。«Montaigne as Satirist»と題する論文の筆者 Ruth Calder はこの部分について、モンテーニュは自分自身を«satirist»と位置付け公にしようとしたと論じている[15]。果たしてモンテーニュが実際にそのような意図を持っていたかどうかはともかく、ルキリウスについて論じたこのホラティウスの引用を契機として所謂「自己描写」が始まっていることは明白な事実である。この後モンテーニュは、自分の物腰や態度、好きなこと・嫌いなこと、得意なこと・不得意なこと、身体的特徴や性格などについて、良いことも悪いことも含め延々と語ってゆくのであるが、そこでは、長所に関する記述よりも短所に関する記述の方が、分量的にも内容的にも際立っている。モンテーニュは「どんな人も私以上に自己を小さく見ることは難しいと思う」と断りつつ、風刺詩人からの引用を数多く散りばめながら、巧妙に自分自身について批評していると言える。この章においては、ホラティウスから10箇所、マルティアリスから3箇所、ユウェナリスから3箇所、ペルシウスから1箇所の引用があり、ローマの風刺詩人の作品から計17箇所もの引用が存在するが、これは、長大な第2巻第12章を除くなら、記述行為として見た場合、この章だけに限定され得る顕著な傾向である。その一例として、『エセー』の原文とペルシウスからの引用箇所を以下に示す。

> (A) Or mes opinions, je les trouve infiniement hardies et constantes à condamner mon insuffisance. De vray, c'est aussi un subject auquel j'exerce mon jugement autant qu'à nul autre. Le monde regarde tousjours vis à vis; moy, je replie ma veue au dedans, je la plante, je l'amuse là. Chacun regarde devant soy; moy, je regarde dedans moy: je n'ay affaire qu'à moy, je me considere sans cesse, je me contrerolle, je me gouste. Les autres vont tousjours ailleurs, s'ils y pensent bien; ils vont tousjours avant,
>
> *nemo in sese tentat descendere,* (Perse, IV, 23.)
>
> «Personne ne tente de descendre en soi-même.»
>
> moy je me roulle en moy mesme. [*Ibid.*, pp.657-658]

モンテーニュは自分自身を研究対象とし、自分の無能さを主題として考察するという行為の正当性に確信を示している。ペルシウスからの詩の引用には、自分自身について考察しようとしない人々への批判とともに、モンテーニュ自身はそれを実践しているとの自負が込められていると言えよう。第3巻第8章においても、ホラティウスの*Satires*から詩の一節を引用しつつ、「私の欠点を公にし告発することで、誰かの役に立つであろう[16]」と述べている。

15）Ruth Calder, «Montaigne as Satirist», in *Montaigne: A Collection of Essays,* New York & London, Garland Publishing, Inc., 1995, Vol. 2, pp.289-299.

16）*Essais,* III, 8, p.922.

モンテーニュが自己を題材として語っていることについては、後にパスカルによって「自己を描こうという愚かな企て[17]」と批判されるところだが、モンテーニュは自己について語ることが世間の非難の対象になることを当時既に十分自覚していたが故に、風刺詩人の引用を頻繁に行うことによって、言わば一種の予防線を張っていると言えるのではないだろうか。

むすび

モンテーニュは、確かに、狭義の«satiriste»には属さない。しかしながら、本稿では、モンテーニュがローマの風刺詩人の詩から数々の引用を行っている事実、及び、『エセー』の構成上、それらの引用詩句が極めて重要且つ不可欠な構成要素となっている事実を指摘し、その意義について考察した。さらには、モンテーニュ自身、衒学者や知識重視の当時の教育体制に対して、豊富な比喩表現を用いながら、批判的且つ風刺的な記述をしている事実も同様に明らかにした。加えて、モンテーニュが自分自身に対しても懐疑的な目を向け、風刺詩人からの引用を助けとしつつ、自己を描くという行為をある意味で正当化しようとしている傾向もまた確認されたと言えよう。ただ、このようなモンテーニュの風刺的記述行為は、ルネサンス文学の大きな潮流の中に位置していることは否定できないものの、ラブレーやロンサール、デュ・ベレーなどの風刺的作品とは一線を画したモンテーニュ独自の風刺精神の産物であり、個人的な嗜好に基づく文字通りの「随想」«essai»と考えるべきであろう。

後記

本稿は、2005年3月5日、大阪大学で行われた大阪大学フランス語フランス文学会研究会第56回シンポジウム：「ルネッサンス文学と風刺」において、筆者がパネリストの一人として発表した「モンテーニュと風刺」の内容に加筆・修正を加えた上での論考である。

（関西学院大学非常勤講師）

17）Pascal, *Pensées*, éd. Lafuma, 780.